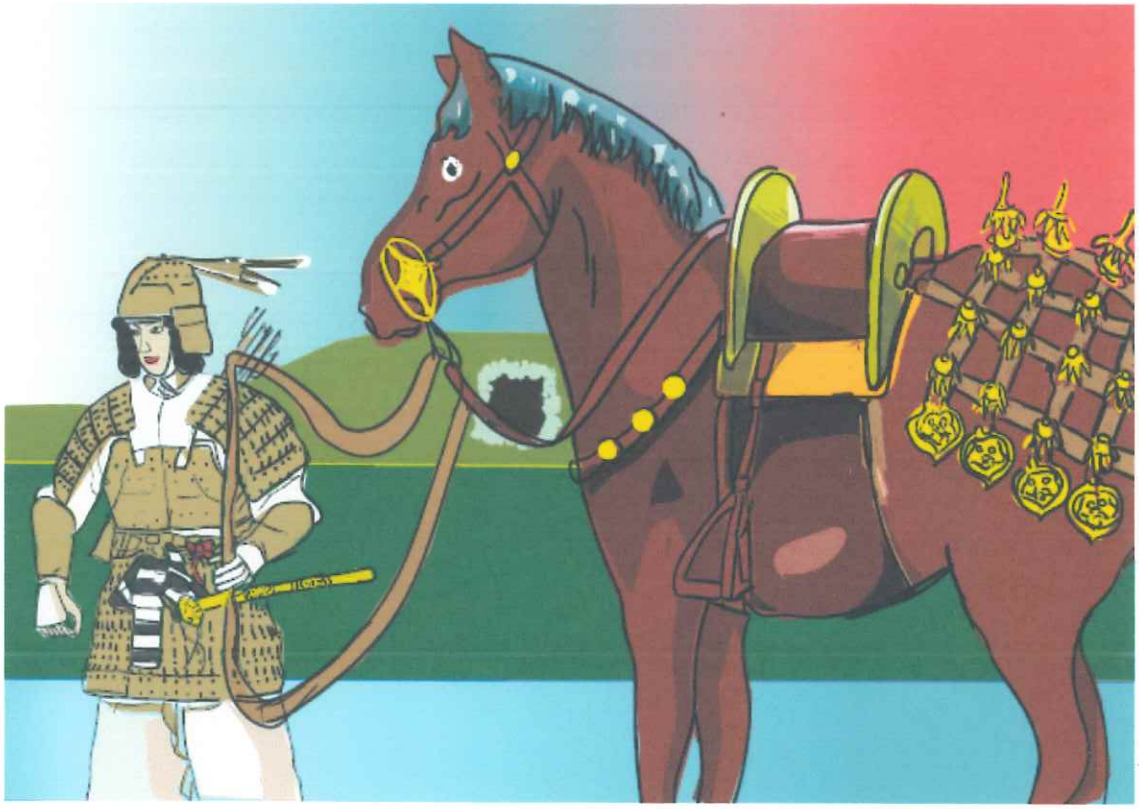
群馬県は本当に馬が群れていたのか？



前橋市立桂萱中学校

１年　安　塚　万佑子

私は小学６年生で歴史を勉強しましたが、中学１年生になり、１学期で学んだ歴史は、１つ１つの出来事を細かく学んで行くものでした。

一昨年、東国文化自由研究の表彰式で群馬県立歴史博物館に行った時、館長さんから綿貫観音山古墳から発見された副葬品の説明がありました。金銅製水瓶や獣帯鏡は中国や朝鮮半島との物の交流の中で伝わったもの、ということでした。そのような貴重な物がなぜ群馬県で発見されたのか？当時の大和政権にとって群馬県の有力者の存在はとても大きな存在だったに違いありません。

中でも一際私の目をひいたのは、主人を乗せた馬を飾り立てた数多くのきらびやかな馬具でした。

群馬は「馬が群れる」と書きますが、今では県内の牧場には牛しかいません。古墳時代には馬の産地として群れるほど馬がいたのか、今年は「群馬県（県名）は本当に馬が群れていたのか？」について、深く調べてみようと思いました。

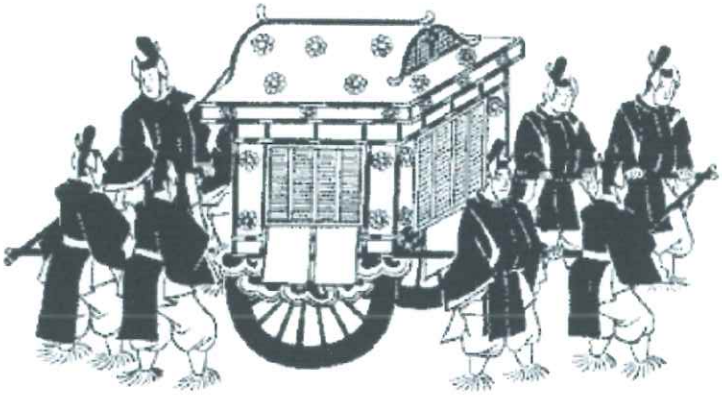
１．群馬県の名前の由来について

1871 年（明治４年）の廃藩置県に際して「群馬県」が県名として

採用されたようですが、前橋・高崎を含んだ県内で、当時最も人口が多く栄えていた「群馬郡」の名前を取ったとされています。

その「群馬郡」でありますが、群馬の古代の読みは「くるま」と呼ばれていたそうで、

① 車持部(くるまもちべ、くらもちべ)という大和政権が使用する輿(こし　※下記挿絵を参照)という車両を製造・管理していた部民が居住していた地域で、それがそのまま「くるま」という地名として残ったという説



② 古い日本語で丸くなっている状態を指すのが「くるま」を表すことから、暴れ川で有名な利根川が曲流している地形から「くるま」という地名になったという説

が有力な説だそうです。

ここからは馬との関係を探すことはできませんでした。

２．大和政権と群馬県の関係について

５世紀頃、馬の生産は中国大陸や朝鮮半島から渡来人によって伝わったものとされています。渡来人とは、５世紀から６世紀にかけて朝鮮半島では高句麗、百済、新羅が勢力争いをし、大和政権は朝鮮半島南部の加耶地区（任那）の国々や百済と交流が深く、援軍として、高句麗や新羅と戦うことがありました。そのような戦乱の影響もあって一族で日本に渡り住んだ人々のことを言います。渡来人は、須恵器（固い土器）を作る技術、かまどを使う生活様式、漢字や儒学、６世紀半ばには仏教を伝え、その後の日本の文化や信仰の一部をになってきました。そして馬は、家畜として農耕や土木作業の動力源として役に立っただけではなく、戦国時代に見られるような人の移動や輸送手段として人間社会に欠かせないものになっていきました。

白井・吹屋遺跡群は、渋川市の北部、利根川と吾妻川の合流点の北西側に位置し、平成２年から平成17年にかけて、国道17号線と国道353号線のバイパス建設工事に関わる発掘調査が行われましたが、ここで発見されたのは蹄跡、直径10 ～ 13cm、深さ0.5 ～ 2cmの丸く底が平らな凹みでありましたが、その大きさ・形状・特徴から馬の蹄跡であると判断されたのです。

「金井東裏遺跡と渋川市の古墳時代（平成２６年度　調査遺跡発表会　資料)」では、発見された蹄跡はそれぞれバラバラの方向を向いていて、特に決まった方向に歩いているものではなく、馬は広い範囲を自由に歩きまわっている状態であり、放牧のような状態にあったとみられました。しかも、蹄跡の中には子馬と思われる小さなものも混じっていたとのことから繁殖も行われていたらしく、まさに馬の生産が行われ、しかも放牧地であったことが判明しました。その放牧地の推定範囲は約６㎢（東京ドームのグランドの約半分程の大きさ）に及ぶほどで、生産規模はかなりの大きさだったようです。

ここで飼育されていた馬の大きさは、蹄の大きさから推測すると、現在のサラブレッドよりもかなり小さく、体高１２５～１３５cm程度の中型馬であったと見られ、日本の在来馬と比較すると、木曽馬程度の大きさだったとみられています。

ではなぜ、馬の産地が群馬であったのか、私の想像も含まれますが、屋久杉の年輪の成長から古墳期前半の平均気温は現在より 2～３度高く、気候は小最適期であったようです。今でこそ北海道で生まれ育つことが多い馬ではありますが、温和で災害のない、かつ交通の要衝（陸路は古東山道で大和地方と結ばれ、海路は太平洋から利根川水

系で結ばれる）として、かつ大和政権がもくろむ関東や東北地方への支配拡大をにらむ拠点として、群馬が大和政権における馬の主要産地のひとつに選定されたもとと推察されます。大和政権は、馬の生産の先進地として名高い中国大陸や朝鮮半島から渡来人を招き入れ、群馬で多くの馬を生産するに至ったと見られています。

これによって群馬県は馬の産地であったことが一部証明されました。

３．発見された馬具が馬の産地であることを証明する

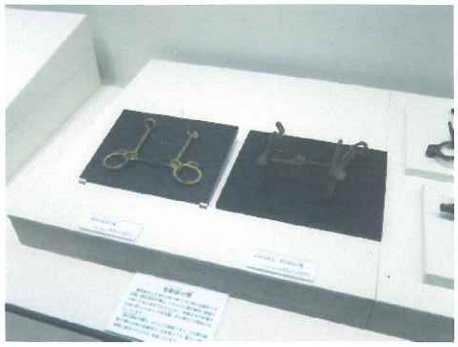
私は綿貫観音山古墳を見学しました。群馬県高崎市にあり、古墳時代の６世紀後半に築造された長さ約97メートルの前方後円墳になります。副葬品からこの地の有力者の墓であったと考えられています。

中段部と墳頂部には埴輪が配列され、二重の周堀を持ち、石室は後円部に築かれ巨大な横穴式石室が南西側に開口していました。石室の

壁面は榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩の切石を積み上げて、天井石は吉井町の牛臥砂岩が用いられていました。

1968年（昭和43年）に発掘調査がおこなわれ、「銅水瓶」など豪華な副葬品のほか、馬具、鉄地金銅張心葉形鏡板付轡（てつじこんどうばりしんようけいかがみいたつきくつわ）、金銅心葉形杏葉（こんどうしんようけいぎょうよう）、金銅歩揺付飾金具（こんどうほようつきかざりかなぐ）が発見されました。これらの馬具などは、朝鮮半島・新羅（しらぎ）で多数の出土例があり、中国や朝鮮半島などと物の交流の一端をうかがわせる大変貴重な史料となっています。

また、綿貫観音山古墳（高崎市）だけでなく、前橋市や伊勢崎市にある古墳の副葬品から馬具が数多く発見されていることからも、まさにこの地が馬の産地であったことが証明され、馬が有力者としての権力を示す一つの道具として大切に飼い慣らされていた様子が目に浮かびました。



鉄地金銅張心葉形鏡板付轡

鉄地に金銅板を張った鏡板が付いた轡のこと。轡とは馬の口に含ませる金具で、鏡板とは轡の両端に付ける金具。心葉形とはハート形を表す。

金銅心葉形杏葉

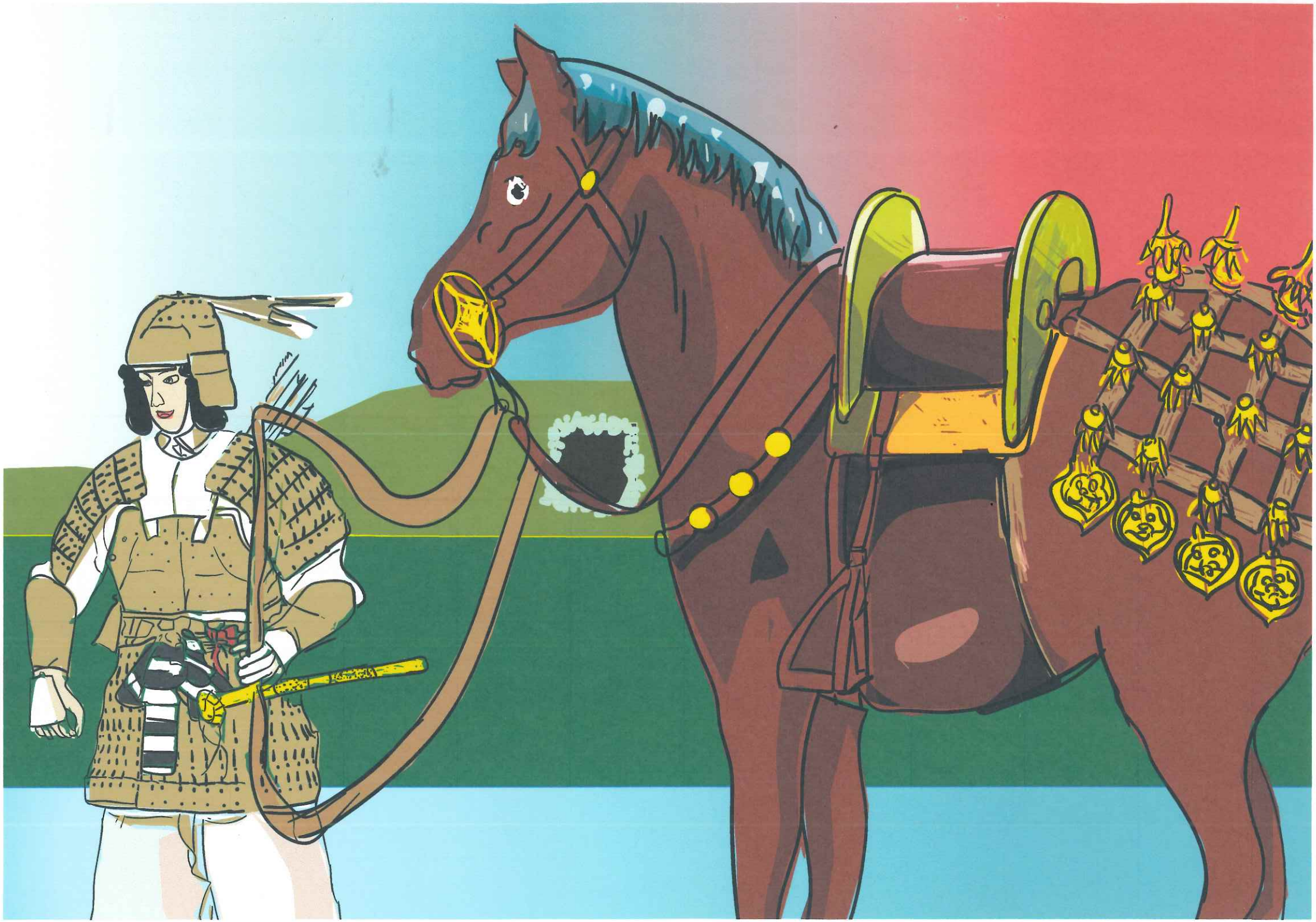
金銅製の杏葉のこと。杏葉とは鞍をつなぎとめる紐などに付ける飾りをいう。

金銅歩揺付飾金具

馬を飾り立てるための金具のこと。歩揺とは花びらの形をした、揺れる飾りをいう。

４．綿貫観音山古墳の有力者を想像する

私は今年４月からデジタルアートを習っています。副葬品から、生前に完成した綿貫観音山古墳（当時は周堀に水が張られていた）の前でたたずんでいる、甲骨を着た有力者とお気に入りの飾られた馬と一緒にいる姿を作成してみました。



5．まとめ

私が調べた群馬県は、その名の通り古墳時代には馬が群れて（放牧地）いました。内陸にありながら交通の要衝、渡来人との絆が大和政権の信頼を生んだ、まさに国際色、そして自然豊かな群馬県がありました。

私はこれからも東国文化を調べ「東国に群馬あり」を証明していきたいと思います。

【引用した文献、写真等】

・渡来人とは　学校指定教科書「新しい社会　歴史」（東京書籍）

・「群馬県」名の由来　https://gogen-yurai.jp/gumma-ken/

・学習メモ　古代房総部民「車持部（クルマモチベ）」と交通

https://hanamigawa2011.blogspot.com/2016/06/blog-post.html

・群馬県教育委員会　国指定史跡　観音山古墳　の案内

・日本国紀　百田尚樹（幻冬舎）

・綿貫観音山古墳と朝鮮半島　右島和夫

・日本の時代から見る韓国時代劇（弥生時代～室町時代）

https://kt.wowkorea.jp/news-read/52484.html